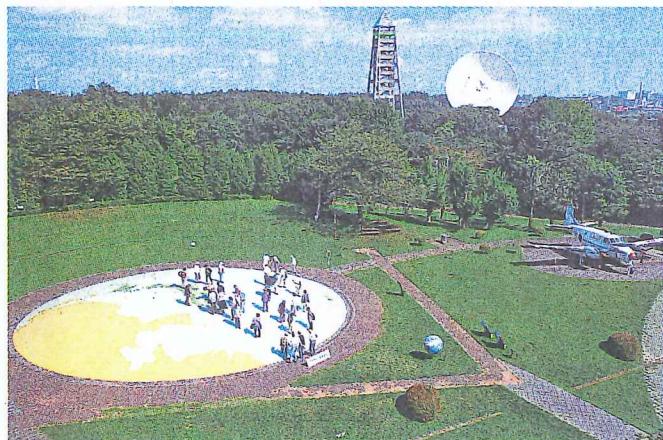


公共事業と教育-学びの場から考える-

No. 15

地球ひろばの全景と日本列島球体模型（茨城県つくば市の国土地理院の『地図と測量の科学館』）



科学館屋外の「地球ひろば」には、高さ約2m、直径約22mの「日本列島球体模型」があり、陶板に焼き付けられた20万分の1地勢図が球体の表面を覆っています。この模型の上に立つて見下ろす日本列島は、高度約300キロの人工衛星から見下ろした地表に相当するもので、東アジア地域におけるわが国の過去現在・未来について、いろいろな気付きを与えてくれます。

古代の日本は、朝鮮半島や中

学校教育の「地理」の学習單元には、必ず地図学習が含まれています。これは日本だけでなく、アメリカ、イギリス、フランスの地理教科書でも同様です。最近では、グローバル・ポジショニング・システム（GPS）や地理情報システム（GIS）が教科書に出てくることも珍しくありません。

道路地図や住宅地図、都市計画図、鉄道路線図、バス路線図、観光案内図、天気予報図、植生図、ハザードマップ、グーグルマップなど、私たちは沢山の地図に囲まれて暮らしています。地図は私たちの生活にかかせないものです。

国土地理院は、国土交通省に設置された測量行政を行う機関で、日本国内の基本図である「地形図」の発行元として知られています。茨城県つくば市の敷地内には、地図や測量の役割（入館無料）が併設されており、施設「地図と測量の科学館」や組み、新しい技術などが総合的に展示されています。

科学館屋外の「地球ひろば」には、高さ約2m、直径約22mの「日本列島球体模型」があり、陶板に焼き付けられた20万分の1地勢図が球体の表面を覆っています。この模型の上に立つて見下ろす日本列島は、高度約300キロの人工衛星から見下ろした地表に相当するもので、東アジア地域におけるわが国の過去現在・未来について、いろいろな気付きを与えてくれます。

古代の日本は、朝鮮半島や中

公共事業と 教育

学びの場から考える
国土学アーチリスト 森田 康夫

●●15

国から、水田稻作、土木技術（ため池造成など）、漢字、仏教などの進んだ文化を取り入れてきました。この球体模型で朝鮮半島や中国から日本を見ると同じように見えたのだと思い、海の向こう側に島国があると、その島国までの距離感は、この模型上からの目線で見るのと同じように見えたのだと思いまます。古代の日本では、日本海側が外国となる玄関口でした。

また、日本海は日本とユーラシア大陸に開まれた大きな湖のようにも見えます。現在、日本海側の都市は、東アジアの都市と姉妹都市提携を結んでいますし、ロシアや韓国の都市と定期航路や定期便の飛行機で結ばれています。

一方で、ロシアのウラジオストク港、韓国の釜山港や仁川港、

中国の大連港・天津港・青島港・上海港・寧波港などの重要な港から、東南アジアや北アメリカ

力に向けて太平洋に出るためには、必ず日本付近の海峡を通過しなければならないことがわかります。

一方で、ロシアのウラジオストク港、韓国の釜山港や仁川港、中国の大連港・天津港・青島港・上海港・寧波港などの重要な港から、東南アジアや北アメリカ

力に向けて太平洋に出るためには、必ず日本付近の海峡を通過しなければならないことがわかります。

一方で、ロシアのウラジオストク港、韓国の釜山港や仁川港、中国の大連港・天津港・青島港・上海港・寧波港などの重要な港から、東南アジアや北アメリカ

国土地理院(地図と測量の科学館)で体感する「国土のかたち」

屋内の展示室1階には、「日本列島空中散歩マップ」と呼ばれる巨大な日本地図があり、専用の赤青メガネ（3D眼鏡）で見ると、日本列島とその周辺海域の起伏が立体的に見えます。1枚の高さから見た日本列島の眺めは迫力満点で、地球上にある100キロを空中散歩しているのが、自分の目で確認できます。日本列島（東日本）が如何に深い海溝の近くに位置し、その海溝にいまにも飲み込まれそうな状況にあるかが、また南海トラフで地震が発生したら如何に短時間で大津波が到着してしまうのかが、自分の目で確認できます。日本の國土が如何に脆弱であるかが体感できるのです。

明治維新の精神的指導者・吉田松陰は、20歳からの数年間、遊學のため全國殆どの地域を踏破し、「地を離れて人なく、人を離れて事なし。故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を觀よ」という言葉を遺していますが、「地図と測量の科学館」にいると、なるほど時代や社会を読み解く鍵は、國土や地理にあるのだと再認識させられます。これは、地図帳やパソコン画面で見ていてはわからない感覚です。

校外学習、修学旅行・遠足等の際に、国土地理院の「地図と測量の科学館」を利用されることをお勧めします。